

准高齢者のサクセスフル・エイジング  
へのアプローチ：  
ソーシャルワーカーの視点

Approach to Successful Aging of Associate Elderly:  
Perspective of social workers

笠 原 幸 子

Sachiko KASAHARA

## 准高齢者のサクセスフル・エイジングへのアプローチ： ソーシャルワーカーの視点

Approach to Successful Aging of Associate Elderly:  
Perspective of social workers

笠原 幸子  
Sachiko KASAHARA

### 要旨

本研究の目的は、高齢者がサクセスフル・エイジングを迎えられるよう、ソーシャルワーカーはいかに支援すれば良いのかについて検討することである。方法として、米国におけるサクセスフル・エイジングの概念、行政が実施した国内の高齢者の意識調査結果を分析・考察する。その結果、高齢期の生き方のモデルとしてのサクセスフル・エイジング研究については、それぞれの学問領域によって多数の研究結果がみられた。ロウとカーンによる研究は老年学(gerontology)として学際的な研究領域を進化させた。65歳以上の長期にわたる高齢期を画一的・統一的に考察することは適切でないため、本研究では、高齢期を意図して迎えることが求められる団塊の世代である准高齢者を対象とする。結論として、ソーシャルワークの視点を5点示した。第1点目は、身体的側面・精神心理的側面・社会環境的側面、さらには、過去・現在・未来という時間軸を加えて、准高齢者の日常生活や生活環境について、准高齢者とソーシャルワーカーが相互に確認し理解を深めること、その際、社会的なつながりの弱い人たち等に対しては、アウトリーチが求められる。第2点目は、准高齢者の能力、意欲・願望、嗜好、自信といった彼(彼女)らのプラス面を把握し、相互に確認し理解すること、第3点目は、准高齢者が生きている現代の社会経済状況や人間関係の変化等を把握し理解すること、第4点目は、ソーシャルワーカーは、准高齢者だけに焦点をあてるのではなく、その家族、地域へも視点を拡大し、システムとして捉えること、第5点目は、ソーシャルワーカーは、希薄化した地域の人間関係を再構築することが求められる。その契機の1つは准高齢者の社会活動であると考えられる。

### キーワード

サクセスフル・エイジング、ソーシャルワーカー、准高齢者

### 1. はじめに

人生100年時代に向かっている我が国<sup>1)</sup>において、定年退職や末子独立等後の高齢者は、住み慣れた家で、可能な限り自立・自律した生活の継続を望んでいる。長期間にわたる高齢期の生活を充実させたいと考えた時、加齢に伴う心身機能の低下と地位や役割の変化という大きなライフイベントに適応しつつ、生活を再編成することが求められるだろう。その際、高齢者を中心とする個人的ネットワーク(personal network)<sup>2)</sup>は重要であり、高齢者の人間関係、社会

関係、特に、地域社会との関係無しに、生活の再編成が困難なことは明白である。しかし、地域では日常の様々な場面における「つながり」の弱まり<sup>3)・4)</sup>を背景に、「社会的孤立」<sup>5)</sup>等の課題が表面化している。人と人とのつながりを育み、誰もがその人らしい生活を実現できる地域社会を構築するためには、自分の暮らす地域をより良くしたいという地域住民の主体性が求められ、高齢者の社会活動は極めて重要な意味を持つ。高齢者が社会参加し活躍することは、高齢者本人の健康や生きがいにも寄与し、介護予防につながるといわれている<sup>6)</sup>。望ましい高齢期の生活を意図的に形成し、高齢者が地域で新しい社会関係をつくり、いきいき暮らすことができるためには、高齢者自身に帰属する構成要素（条件）と支援する専門職に帰属する構成要素（条件）がある。

そこで、本研究では、米国におけるサクセスフル・エイジングの概念、行政が実施した国内の高齢者の意識調査結果を参考に、高齢者がサクセスフル・エイジングを迎えられるよう、ソーシャルワーカーはいかに支援すれば良いのかについて検討することを目的とする。なお、ソーシャルワーカーは、その実践分野によってさまざまな機能があり、多様な職種が相談援助実践を行っている。そのため、本論では、第12回社会保障審議会福祉部会福祉人材確保専門委員会（2017年10月）にて配布された資料である「ソーシャルワーク専門職である社会福祉士に求められる役割等について」に記されているように、「地域共生社会の実現に資する『包括的な相談体制の構築』や『住民が主体的に地域課題を把握して解決を試みる体制づくり』を推進する」という地域包括ケアシステムに着目しつつ、包括的な相談体制や住民主体の地域課題解決体制を構築し、地域住民を支援する機能を持つソーシャルワーカーに焦点を当てて論じる。さらには、IFSW（International Federation Social Workers）のメルボルンで開催された総会（2014年7月）にて承認されたソーシャルワークの定義<sup>7)</sup>に準じ、クライアントの幸福増進とクライアントを取り巻く地域社会等に関与するソーシャルワーカーに焦点を当てて論じる。また、サクセスフル・エイジングについては、「幸福な老い」<sup>8)</sup>、「幸福であるという感情をもっていることと、現在および過去の生活に満足していること」<sup>9)</sup>、「身も心もつつがなく年をとっていくこと」<sup>10)</sup>、「高齢期の成長のために、課される独自の課題に、対応するための活動を実践すること」<sup>11)</sup>等の日本語訳の定義を踏襲して論を進めるが、多くの識者が合意した日本語訳はないので、サクセスフル・エイジングと表記する。

## 2. サクセスフル・エイジングとは何か

### 1) 米国を中心にしたサクセスフル・エイジングの研究

1950年代より、米国を中心にサクセスフル・エイジングに関する研究発表が見られるようになった。高齢期の生き方のモデルとしてのサクセスフル・エイジング研究については、学術論文を対象に発行年度を限定せずに、和文はCiNiiを用いて「サクセスフル・エイジング」、英文はPubMedを用いて「successful aging」をキーワードにして2018年9月26日に検索した。その結果、和文では220、英文では5879の研究論文等が発表されていた。さらに、国立国会図書館のデータベースで検索した。検索した文献を分類記号で分類し、被引用件数の多い文献を順に検討した。その結果、学問領域によって関心の対象が異なるが興味深い論文を複数整理することがで

きた。フィッシャー<sup>12)</sup>もサクセスフル・エイジングに関して、それぞれの学問領域によって関心の対象が異なるため、統一して合意の得られた思考の形式が見られないと指摘している。

例えば、医学におけるサクセスフル・エイジングは、成人病の克服や加齢に伴う生理的機能変化の解明等に焦点を当て、寿命を延ばすことに関心を寄せた。その結果、我が国においても、平均寿命は男性81.09歳、女性87.26歳になった。さらに、iPS細胞の発明は、再生治療、病気の原因究明、新薬の開発等、大きな期待が寄せられている。寿命の伸展という目標がある程度達成されると、個人や社会の関心は、いかに長生きするかということから、いかに生きるかという質を問うようになった。つまり、寝たきりになったり、認知症を患うことのない健康長寿の期間を延ばすこと<sup>13)</sup>や高齢期の生活の質を高めること<sup>14)</sup>へ移行していった。理想的な高齢者像を目指して個人及び社会が計画し努力するようになったのである。メディアや講演会・講座のタイトルをみると「自立」、「社会活動」、「地域貢献」、「健やかに老いる」等といった言葉が出現している。

社会学、心理学等の学問領域では、サクセスフル・エイジングの構成要素（条件）や定義を明らかにする研究よりも、モラル（志気）や生活満足度等の操作的概念を用いた測定指標に関する研究が多数みられた。1956年に、カットナーは、カットナー・モラル・スケール<sup>15)</sup>を発表し、個人の意気込みを意味するモラル（志気）を、サクセスフル・エイジングの測定概念として研究した。その後、ニューガルテンらの生活満足度尺度A（Life Satisfaction Index A;LSIA）<sup>16)</sup>、ロートンのPGAモラルスケール（Philadelphia Geriatric Center Morale Scale）<sup>17)</sup>、古谷野らの生活満足度尺度K（Life Satisfaction Index K;LSIK）<sup>18)</sup>等の尺度が有名である。また、活動理論<sup>19)</sup>や離脱理論<sup>20)</sup>の検証研究を契機として、モラル（志気）や生活満足度等を従属変数とし、社会活動等を独立変数とする分析方法で、サクセスフル・エイジングの関連要因を明らかにする研究も多数みられる。一方、このようにサクセスフル・エイジングの評価基準を主観的评价だけで測定する危うさが存在することも指摘された。つまり、人間は困難な状況であっても心の可塑性や補償、適応能力によって、状況を肯定的に捉えることがある。他者が客観的に見て、困難な状況にある人と安寧な状況にある人との主観的幸福感到違いがないという研究結果がある<sup>21)</sup>。また、生活満足度やPGAモラルスケールは、未来を思考したり、発達・成長するという構成概念になっていないという指摘<sup>22)</sup>や主観的幸福感が高い人の方が低い人よりも好ましいが、例えば、「ゴミ屋敷」に住んでいる高齢者のように、主観的幸福感が高いが社会的に望ましくない状況にあった場合、良いと判断するのかという指摘<sup>23)</sup>がある。

社会福祉学、ソーシャルワークにおいて、サクセスフル・エイジングに関連した論文数は少なかったが、白澤<sup>24)</sup>は、クライアントがサクセスフル・エイジングを得るためのアプローチ方法として、ソーシャルワーカーは、クライアントの生活の質（QOL）と自律性（autonomy）高めることが求められると指摘していた。岡本<sup>25)</sup>は、高齢者のサクセスフル・エイジングの主要な構成要素である社会活動に着目し複数の論文を発表していた。興味深い結果では、社会活動の概念定義や測定方法は研究によって多様に存在し、社会活動の5つの操作的定義を用いし、各定義の社会活動参加率を算出して比較すると、最大に50ポイント以上異なるという結果がみられた。このように社会活動に関して、概念定義に一致した見解がないため、多様な捉え

方があった。社会活動を①社会的活動（地域活動、町内会活動、奉仕活動等）、②学習的活動（老人大学、カルチャーセンター、市民講座等）、③個人活動（近所づきあい、買い物、友人訪問、旅行、友人や知人と食事等）、④仕事の4つの側面から捉えている論文が複数あり<sup>26) -28)</sup>、橋本ら<sup>29)</sup>は4側面を踏まえて「社会活動指標」を作成した。この指標を基本としつつ、研究者によっては若干の変更を加えて使用する場合もあるため、社会活動に関する各種調査結果を比較することは難しい。社会活動の尺度開発の研究が求められる。さらに岡本<sup>30)</sup>は、古谷野らの生活満足度尺度を用いて高齢者の社会活動との関連を男女別に研究した。その結果、女性では個人活動が活発なほど生活満足度得点が高く、男性では社会活動と生活満足度との関連はみられなかった。

サクセスフル・エイジングについて注目を浴びた研究としては、医学者であるジョン・ロウと社会学者であるロバート・カーンの研究をあげることができる。彼らは、高齢者人口の大部分を占める元気な高齢者に着目し、元気な高齢者には「普通のエイジング」と「サクセスフルなエイジング」があるとし、「サクセスフルなエイジング」の構成要素（条件）として、①病気やそれに伴う障がいリスクが低いこと、②高い身体・認知機能を有していること、③生産的な活動に参加し、人生への積極的な関与があることを提案した<sup>31) -32)</sup>。彼らの提案は、高齢者をネガティブな側面ではなく、ポジティブな側面から捉えたこと、そして、医学、看護学、社会学、心理学、社会福祉学、経済学等、個別で行われていた高齢者の研究を統合し、老年学（gerontology）として学際的な研究領域を進化させた。また、自立を重要視する米国人の気質と合致していた。「老後の生活様式を我々が選択できるようにする」という創設目的をもつアメリカ退職者協会AAPA（American Association of Retired Persons）のホームページを見ると、サクセスフル・エイジングを代表するような写真、観光ツアー、エンタテインメント、ショッピングからロングタームケアサポート等、高齢者への各種サービスを紹介している。

## 2) サクセスフル・エイジングの功罪

ロウらが指摘したサクセスフル・エイジングに対して、米国老年学会（The gerontology Society of America）では1999年に、「ポストゲノム時代におけるエイジングの新たな視点（New Perspectives on Aging in the Post Genome Era）」というテーマで、第52回大会がサンフランシスコで開催された時、サクセスフル・エイジングを再検討する「The Paradox of “Successful Aging”: Critical Look at Neglected Dimensions」というシンポジウムが開催された<sup>33)</sup>。同シンポジウムでは、①サクセスフル・エイジングの3条件を充足するためには、身体的及び精神的健康と経済的安定が求められ、充足しない場合、高齢者に不全感を与え、周囲からも人生の落伍者・失敗者とラベリングされてしまう傾向があること、②高齢者の生活や意識は多種多様であるため、どのレベルに達すればサクセスフル・エイジングなのか明確でないため、サクセスフル・エイジングについては、概念定義するよりも、測定指標に関する研究が求められること、③生産的活動は、労働し収入を得るという経済活動を意味していたが、それだけではなくボランティア等の収入を伴わない社会活動が求められること、④サクセスフル・エイジングの達成を個人要因に帰属させ、環境要因の影響を軽視したこと等<sup>34) -37)</sup>が指摘された。その結果、こ

れまで以上に学際的チームによる多数の研究が行われ、①生産活動（productivity）の意味は、非経済的活動を意味する社会活動を含むこと、②サクセスフル・エイジングの達成において、主観的な側面である積極的な精神（positive spirituality）を4つ目の条件として加えること等<sup>38)</sup>の研究結果が発表された。米国を中心にして、多額の研究費が学際的研究に投入され多くの研究結果が発表されている。

サクセスフル・エイジングの構成要素（条件）や定義を明らかにしても、評価スケールを用いて評価しても、サクセスフル・エイジングを迎えることはできない。多様な高齢者がサクセスフル・エイジングを自分のものにするためには、必要に応じて、社会資源の利用や専門職のサポートも求められるだろう。

何らかの支援を利用しつつ、生活のコントロール感を持って、人生の終焉まで自立・自律して生活すること、生産活動に参加することは、高齢者の願望であり、多く的高齢者が努力し達成している<sup>39)</sup>。その一方で、それが目的化し支配的になると、何らかの支援が必要になった時、人とのつながりを絶ってまで自立を固守する形相が見られたり、加齢に伴って、他者との関係を選択的に縮小する傾向がみられる<sup>40)</sup>。サクセスフル・エイジングの研究は、高齢期間の長期化、単身世帯の増加、個人のライフスタイルの多様化等を踏まえた新たな展開が求められる。

### 3) 日本におけるサクセスフル・エイジング

超高齢社会を迎えた我が国のサクセスフル・エイジングを検討する場合、「高齢者」は均質的な集団ではない<sup>41)</sup>と指摘されているように、「65歳以上を高齢者とする」というステレオタイプ的な定義を前提とした検討では本質を見失う。日本老年学会と日本老年医学会の「高齢者に関する定義検討ワーキンググループ報告書」(2015)では、心身の老化現象の出現に関する種々のデータの経年的変化を検討した結果、①加齢に伴う身体・心理機能の変化に「若返り」現象が見られる、②74歳までの人たちでは、活発な社会活動が可能な人が大多数を占めている、③意識調査結果においても、65歳以上を高齢者とすることに否定的な意見が強い、④社会的な面の老化の指標を検討した場合、心身の老化のような明確な傾向は認められなかった。これらの理由により、同報告書では、65歳～74歳を准高齢者（准高齢期＝pre-old）、75歳～89歳を高齢者（高齢期＝old）、90歳以上を超高齢者（超高齢期＝oldest-old, super-old）と定義している<sup>42)</sup>。65歳以上の長期にわたる高齢期を画一的・統一的に考察することは適切でない。連続的なものであることを前提に、高齢期を3区分して、サクセスフル・エイジングのあり方について考察することが妥当である。

多くの人の関心は、団塊の世代が75歳以上となる2025年である。1946年～1949年に生まれた団塊の世代は、現在、准高齢者と呼ばれる人たちである。ロウとカーンが指摘したサクセスフル・エイジングの3条件（①病気やそれに伴う障がいリスクが低く、②高い身体・認知機能を有し、③生産的な活動に参加している）を達成している人たちが大多数を占めている。彼（彼女）らは、第二次世界大戦後、急激に変化した社会で成長し、高度経済成長の担い手であり、核家族化、大量生産大量消費を経験し、公的年金制度において恩恵を受ける世代である<sup>43)</sup>。新しい人生観・価値観・習慣等を受け入れ、新しいライフスタイルの担い手であり続けている人



たちである。活躍してきた半世紀の間に、平均寿命はおよそ30年延びた。図1のように、准高齢者はおおよそ8割の人が元気である。定年退職や末子独立等後の高齢期が長期間に及ぶことはほぼ確実であり、高齢期を意図して迎えることが求められる最初の世代である。故に、彼（彼女）らに合致したサクセスフル・エイジングの研究が期待される。

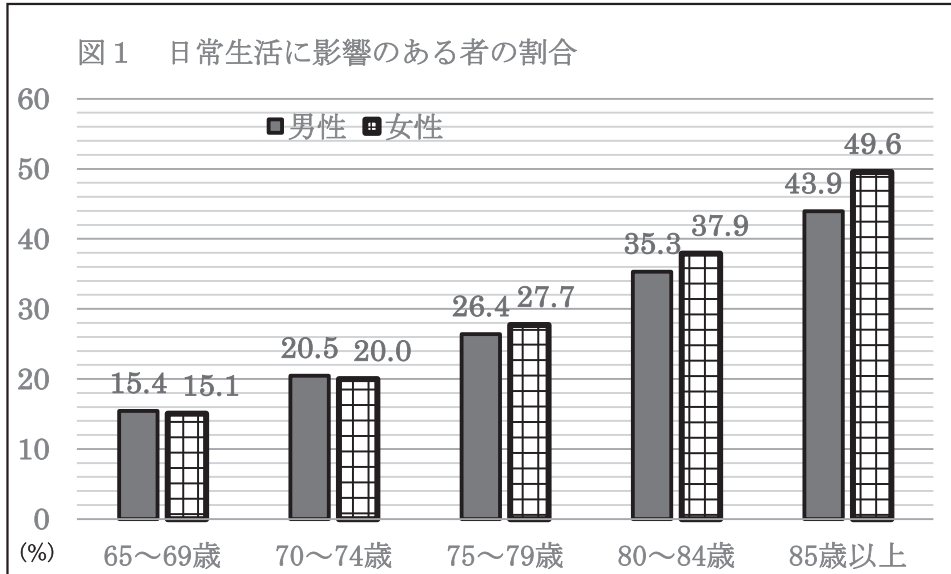


図1 日常生活に影響のある者の割合

厚生労働省「国民生活基礎調査」（平成25年）

#### 4）団塊の世代（准高齢者）のサクセスフル・エイジング

団塊の世代（准高齢者）のサクセスフル・エイジングを検討する場合、発達心理学者のボルテスらのSOC（Selective Optimization with Compensation）モデル<sup>21)</sup>が興味深い。彼らは、加齢に伴う身体的・精神心理的機能の低下を認め、残された機能や社会資源を活用しながら、充実した生活を営むことがサクセスフル・エイジングであると指摘した。89歳まで現役であったピアニストを例にあげて、①選択、②最適化、③補填という3つの要素が相互に関連していると指摘した。①選択とは、これまで取り組んできた活動領域の中から（これまでの活動が馴染まない場合、新たな活動領域を見つける人もいる）、自分の現状に即し、自分にとって意味のある領域を選び、新たな目標を設定すること、②最適化とは、選択した領域に残された機能や社会資源を集中的に投入して、新たな目標の達成に努力すること、③補填とは、失った機能を残された機能や社会資源で上手く補い、新たな目標の達成を可能にすることと説明した。加齢に伴う身体的・精神心理的機能の低下を認め、残された機能や社会資源を活用しながら、充実した生活を営むことを指摘したSOCモデルは、高齢者を射程に入れたモデルとして受け入れやすい。しかし、SOCモデルを実行するためには、高齢者は、①身体的・精神心理的機能及び社会環境の変化に対するセルフ・アセスメント能力やセルフ・モニタリング能力、②新たな目標の

設定及びそれを達成するための実行能力、③残された機能や社会資源の活用能力が求められる。SOCモデルは主体的な高齢者像を前提としているようだ。SOCモデルを実行し続けるためには、高齢者自身が手段的支持<sup>44)</sup>及び情緒的支持<sup>45)</sup>に恵まれ、それを選択的に活用する能力も求められるだろう。SOCモデルは、自立心のある一部の高齢者に対しては当てはまるかもしれないが、誰に対しても適合するモデルとは言い難い。人は、多様な環境の中で、多様な体験をし、多様な人生を生きている。そこで、本研究では、高齢期の個体差は大きいということを前提に、准高齢者が自立性を高め、サクセスフル・エイジングを迎えられるよう、ソーシャルワーカーはいかに支援すれば良いのかについて検討する。

### 3. サクセスフル・エイジングへのアプローチ

#### 1) 研究方法と倫理的配慮

「高齢者に関する定義検討ワーキンググループ報告書」が指摘するように、心身機能の変化の出現は遅延しており、生物学的年齢は5歳～10歳程度若返っている。しかし、社会生活の変化は、心身機能の変化のように明確な傾向は認められなかった。なぜならば、定年退職等のような社会生活の変化、つまり、社会的老化は、歴年齢による出現が多いし、高齢者自身の生活等に対する意識や人間関係等から影響を受けることが多いと考えられるからである。よって、准高齢者が生きている現代社会の情勢や彼（彼女）らの生活等に対する意識や人間関係等について理解を深めることが求められる。

そこで、総務省「平成27年国勢調査」、内閣府「平成25年高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」、内閣府「平成27年度高齢者の生活と意識に関する国際比較調査」、「平成28年高齢者の経済・生活に関する調査」のデータから分析を行った。倫理的配慮としては、自説と他説の区別は厳格に行い、他説の引用等は注意を払った。

#### 2) 「一人暮らし」の准高齢者の割合の変化

1990年から2015年までの国勢調査結果、全世帯の中で、准高齢者の男女及び高齢者の男女の「一人暮らし」の割合の変化をみると、「男性」、「女性」とともに増加していることがわかる。値は低いですが、准高齢者の「男性」の増加は顕著である（図2）。これまでは寡婦の研究は多くみられたが、今後は「高齢期の男性の一人暮らし」の研究も期待される。「女性」は75歳以上の高齢者になると約4人に1人が「一人暮らし」になり、75歳で「一人暮らし」になった「女性」の場合、平均寿命から推測すると、寡婦期間はおおよそ12年間に及ぶ。



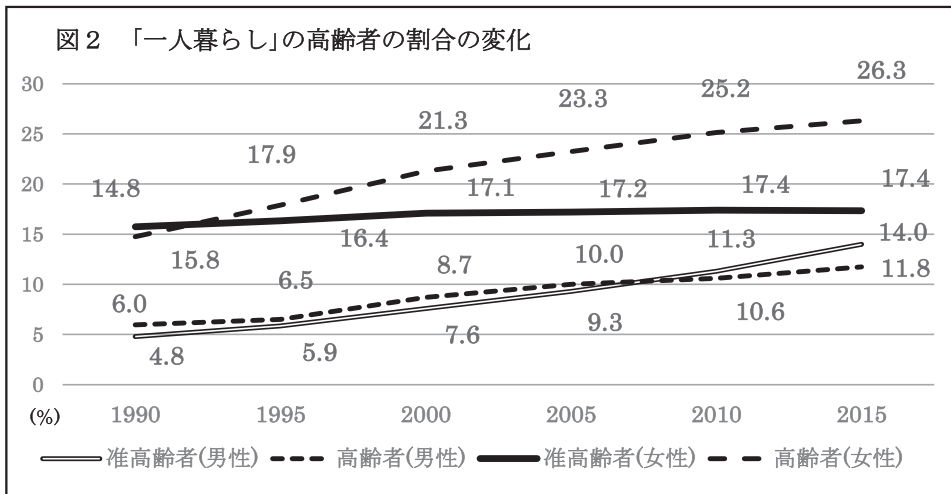


図2 「一人暮らし」の高齢者の割合の変化

「平成28年高齢者の経済・生活に関する調査」結果では、男女とも、年齢が高くなると「貯蓄がない」と回答する者が増える。このような結果は、年金収入が基本となる高齢期においては、必要な生活費の不足分は貯金で賄うため当然の結果と考えられる。しかし、「一人暮らし」に着目すると、「女性」の場合は貯蓄がない人は「30.8%」だが、「男性」の場合、46.2%が「貯蓄がない」と回答していた（図3）。特に、「既婚（離別）」（47.4%）と「未婚」（37.5%）の男性において貯蓄がない人が多い（作図はない）。「経済的な暮らし向き」に対して、「ゆとりがあり、全く心配ない」では、75歳以上の高齢者が16.3%で最も高かった。一方、「苦しく非常に心配」では、一人暮らしの男性が19.8%で最も高かった（図4）。作表はしていないが、「収入（年金を含む）をすべて合計すると、税込みで1か月当たりの平均額（ボーナスがある場合は、それを含めて平均した額）はおおよそいくらくらいになりますか」という質問に対して、男女ともに「一人暮らし」で収入が低く、20万円未満の層で「男性」が7割、「女性」が8割を占めていた（平成28年高齢者の経済・生活環境に関する調査）。

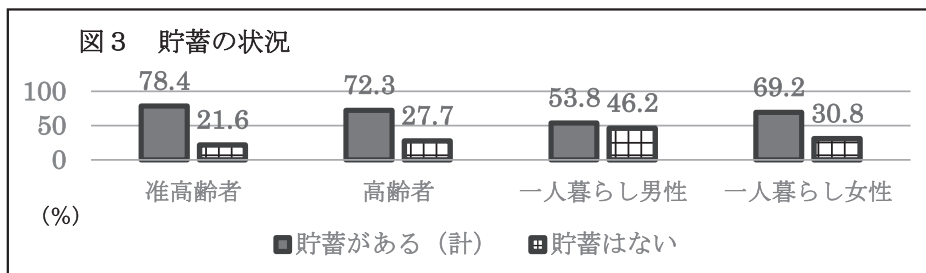


図3 貯蓄の状況

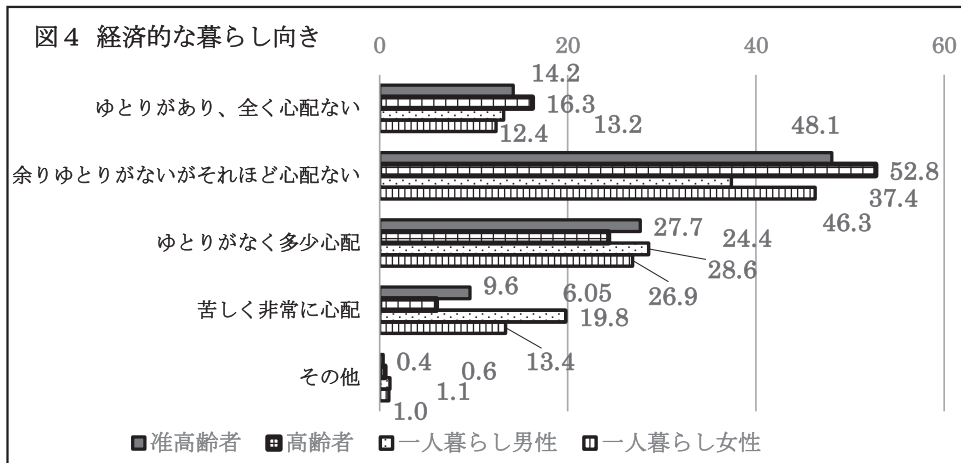


図4 経済的な暮らし向き

また、「平成28年 高齢者の経済・生活環境に関する調査」結果では、男女とも、年齢が高くなると住んでいる地域での社会的活動（貢献活動）は「特に活動はしていない」人が増えていた。加齢とともに身体機能が低下するため、社会的活動（貢献活動）を控えている傾向が推測される。一方、「一人暮らし」の男性高齢者は、「特に活動はしていない」割合が79.1%で高かった（図5）。

「平成25年高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」結果では、社会活動に参加している「一人暮らし」の高齢者は52.2%であり、高齢者全体（61.0%）よりも8.8ポイント低かった。「参加したい活動はありますか」という質問に対して、「活動に参加したいものはない」では、「一人暮らし」の高齢者は43.5%であり、高齢者全体（27.5%）よりも16.0ポイント高かった。「社会活動に参加するために必要なことは何ですか（複数回答）」という質問に対して、「一人暮らし」の高齢者は、「わからない」が11.9%（全体は5.7%）であった。「どのようなきっかけがあれば、活動に参加すると思いますか（複数回答）」という質問に対して、活動に参加するきっかけは「特にない」が52.1%（全体は40.7%）であった（作図はない）。

限られたデータにおいて妥当な考察をすることは難しいが、「一人暮らし」の高齢者は、社会活動に対して肯定的で積極的であるとは考えにくい。社会的つながりが弱い人の多くは自尊心が低下し、自ら主体的に社会との関係を構築できない場合が多い<sup>46)</sup>。「一人暮らし」の高齢者へのアウトリーチが求められる。

このような結果から、①「一人暮らし」の高齢者は、「女性」、「75歳以上」、「既婚後、配偶者と死別した者」の比率が高いこと、②「男性」の「一人暮らし」の高齢者が増加傾向にあること、③「一人暮らし」の高齢者は社会活動の関心は低い傾向があることが推測された。

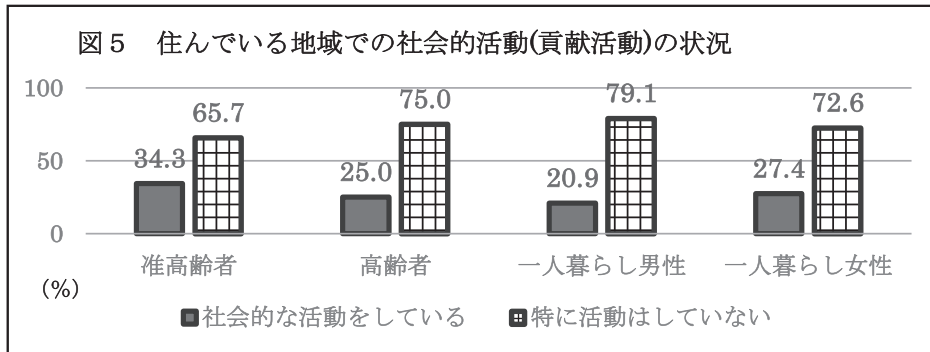


図5 住んでいる地域での社会的活動（貢献活動）の状況

### 3) 「夫婦のみ」の准高齢者の割合の変化

1990年から2015年までの国勢調査結果、全世帯の中で、准高齢者の男女及び高齢者の男女の「夫婦のみ」の割合の変化をみると、1990年から一貫して、「男性」「女性」ともに、夫婦二人暮らしが増加していることが理解できる。男女の平均寿命に差があるため、高齢者では「夫婦のみ」の生活に男女差が見られるが、准高齢者は、高齢者のような大きな男女差はみられない。また、男性に着目すると、高齢者の方が3.4ポイント高くなっている（図6）。

このような状況は、男性の「一人暮らし」の増加が影響していることが推測できる。このような結果から、男性の寿命の伸展で、高齢者の夫婦二人の暮らしも増加している。准高齢者から、夫婦だけで暮らすという暮らし方を夫婦で作り上げていくことが求められるようだ。

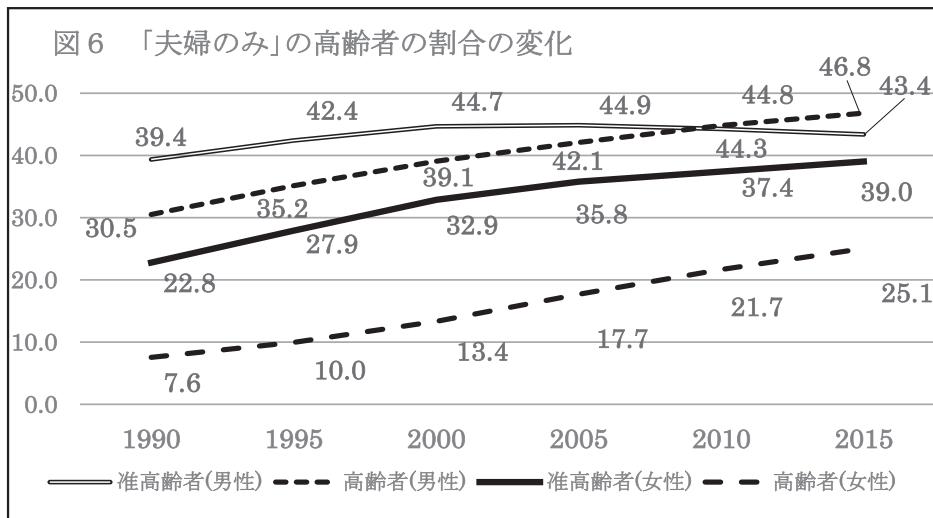


図6 「夫婦のみ」の高齢者の割合の変化

「平成27年度高齢者の生活と意識に関する国際比較調査」の「家族の生活に果たす高齢者の主な役割」（家族と一緒に暮らしている方を対象）において、「男性」は、「家計の支え手（かせぎ手）である」や「家族や親族関係の中の長（まとめ役）である」といった役割を担っていた。しかし、「家事を担っている」では、「男性」が2.4%であるのに対して、「女性」が75.5%で際立って高く、「特に役割はない」では、「男性」が17.0%であるのに対して、「女性」が7.9%であった（図7）。「生活に果たす准高齢者の役割」の調査結果において、性別により、役割や労働に相違がある状況がみられたことは想定外であった。

定年退職後は「夫婦のみ」で一緒にいる時間が長くなることは明らかである。生活に果たすそれぞれの役割について、夫婦で話し合うことが必要かもしれない。

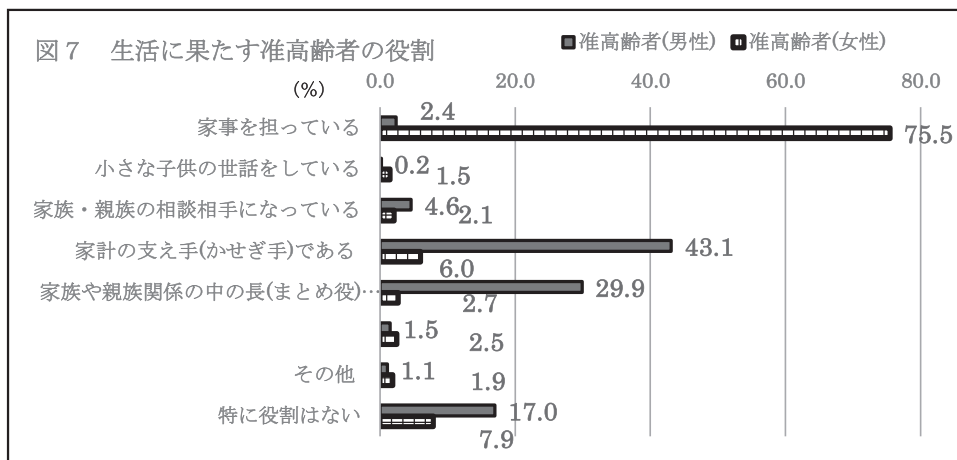


図7 生活に果たす准高齢者の役割

夫婦関係を検討する場合、浅川らの研究<sup>47)</sup>及び古谷野の研究<sup>48)</sup>が興味深い。浅川らは、高齢者の社会関係について、①「サポート」、②「情緒的一体感」という2つの基本的な次元を提案した。①は「ちょっとした用事をしてくれる」等の手段的サポートと「悩みを聞いてくれる」等の情緒的サポートの授受によって構成され、②は「一緒にいてほっとする」という親密さの次元である。2つの次元は相互に関連しているが明確に区別できる次元である。古谷野はこの2つの次元で調査した。夫婦関係に関する調査結果をみると、「夫」にとって「妻」は、2つの次元で高い値であった。つまり、「夫」にとって「妻」は、サポートの授受を行うと同時に、「一緒にいてほっとする」情緒的一体感を感じさせる他者であった。一方、「妻」にとって「夫」は、2つの次元で、「夫」にとって「妻」の値よりも低かった。つまり、「妻」は「夫」に対して、「ちょっとした用事をしてくれる」や「悩みを聞いてくれる」こと、「一緒にいてほっとする」ことにおけるサポート期待が、夫よりも低いことを示す。興味深い結果としては、「高齢者」にとって「同居の嫁」は、①のサポートと②の情緒的一体感が逆の値を示した。「同居の嫁」は①のサポートの次元での値は高いが、②の情緒的一体感の値は低かった。

「平成27年度高齢者の生活と意識に関する国際比較調査」結果から、「生きがい（生きている

ことの喜びや楽しみを実感すること）を感じるのはどのような時ですか」という質問に対して、「夫婦団らんの時」に着目すると、男性は31.9%であったが、女性は20.8%であった。夫婦の認識に11.1ポイントの差がみられた（作図はない）。

「夫婦」の関係は個別性が高いため断言できないが、このような結果から、①「夫婦は一体」、「家族は特別な存在」ではなく、「最も身近な他者」という理解が求められること、②望ましい高齢期の「夫婦のみの生活」を意図的に形成することが求められることが推測された。

#### 4) 准高齢者の主観的な健康や家族との関係

「平成27年度高齢者の生活と意識に関する国際比較調査」では、准高齢者に対して「あなたは、現在、健康ですか」という質問に対して、「健康である」が67.0%で、「あまり健康とはいえないが、病気ではない」が28.6%と回答していた。自らの健康状態を前向きにとらえていた。「日頃、健康について心がけていること」（複数回答）という質問に対しては、「規則正しい生活を送る」（59.6%）、「休養や睡眠を十分とる」（58.0%）、「栄養のバランスがとれた食事をする」（58.0%）、「散歩や運動をする」（56.7%）というように身体的健康に留意している傾向があった。しかし、「気持ちをなるべく明るく持つ」という回答は38.9%であった（作図はない）。精神的健康に対しては意識が低いようだ。

精神的健康を推測する上で欠かせないものには、ストレスや生活に対する満足度等がある。「現在、日常生活で悩みやストレスがありますか」という質問に対して、「大いにある」（6.2%）と「少しはある」（60.4%）を合算すると6割を超えていた。一方、日常生活で悩みやストレスが「まったくない」に着目すると、准高齢者は33.8%であるのに対して、高齢者は51.7%であった。准高齢者の方が日常生活で悩みやストレスが高いようだ。また、「現在の生活に満足していますか」という質問に対して、「満足している」は、高齢者は36.1%であったが、准高齢者は25.9%であった（作図はない）。健康であると認識しているが、悩みやストレスがあり、生活に対して満足しているとは言い切れない准高齢者の状況が推測された。

「生きがい（生きていることの喜びや楽しみを実感すること）を感じるのはどのような時ですか」（複数回答）という質問に対して、准高齢者は「趣味に熱中している時」（48.1%）が高く、高齢者は「子供や孫など家族との団らんの時」（49.8%）が高かった（図8）。また、男性の場合では「趣味に熱中している時」（45.2%）、「子供や孫など家族との団らんの時」（41.9%）、「テレビを見たり、ラジオを聞いている時」（35.5%）、女性の場合では「子供や孫など家族との団らんの時」（51.1%）、「おいしい物を食べている時」（47.1%）、「友人や知人と食事、雑談している時」（46.4%）であった（作図はない）。

「老後の生活費に対する考え方」という質問に対して、「家族や公的援助に頼らないように働いて準備」は45.7%で最も高く、「政策において若い世代と高齢者のどちらを重視すべきですか」という質問に対して、「若い世代をもっと重視すべき」（37.5%）で、「高齢者をもっと重視すべき」（40.3%）とは大きな差がなかった（作図はない）。

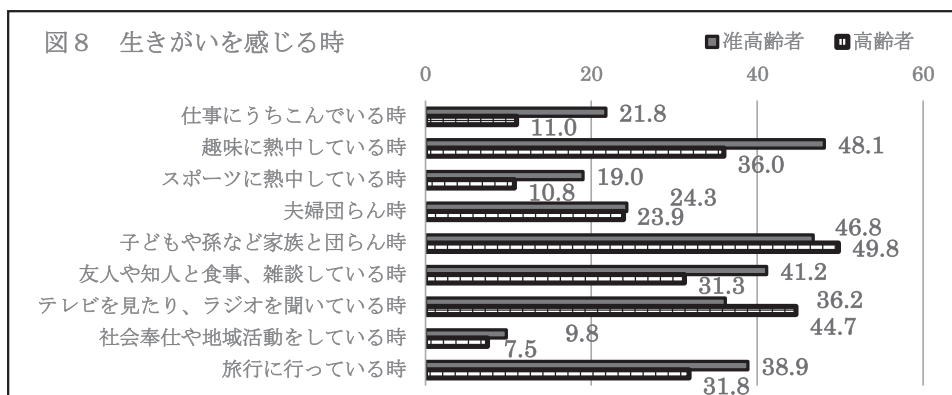


図8 生きがいを感じる時

「子どもや孫とのつきあい方」についての質問では、准高齢者は「ときどき会って食事や会話をするのがよい」(52.9%)が、「子どもや孫とはいつも一緒に生活できるのがよい」(23.1%)を大幅に上回った(図9)。実際に、「別居している子どもや孫との接触頻度」を質問すると、准高齢者は「週に1回以上」(33.2%)が最も高かった(図10)。調査年次別に子どもや孫とのつきあい方をみると、「ときどき会って食事や会話をするのがよい」は1回目調査結果より次第に増加し、「子どもや孫とはいつも一緒に生活できるのがよい」は1回目調査結果より次第に減少していた(表1)。家族(子どもや孫等)に多くを望まず、自分のことは自分でなんとかすることを好ましいと考えるとともに、子ども世代への思いやりもうかがうことができた。

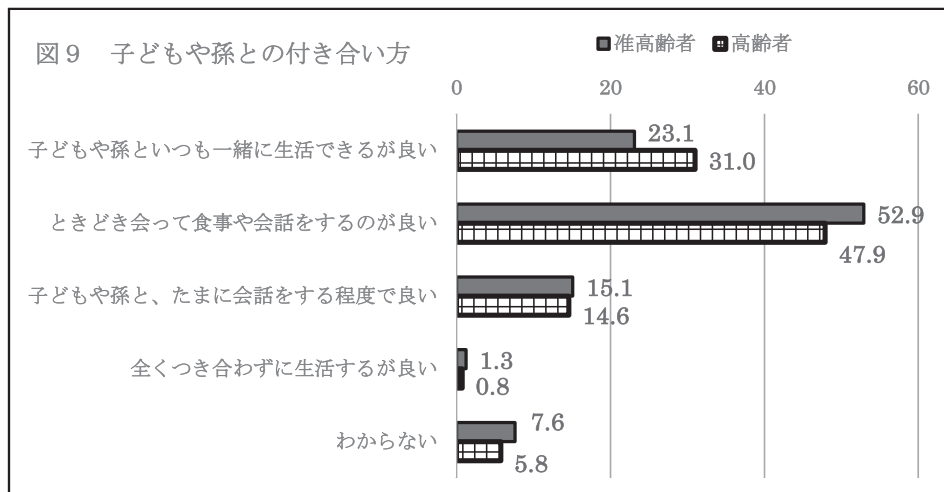


図9 子どもや孫との付き合い方



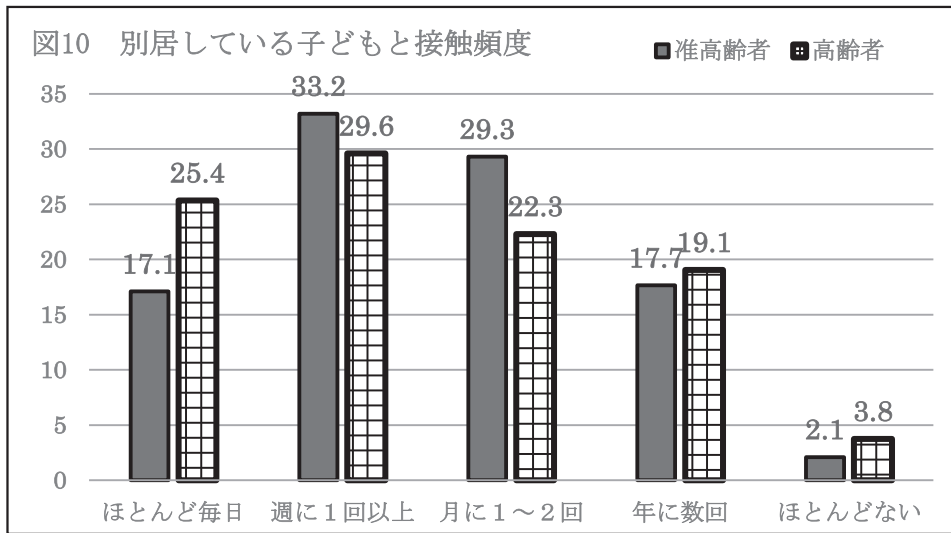


図10 別居している子どもと接触頻度

このような結果から、准高齢者は、①自らの健康状態を前向きにとらえているが、精神的健康に対して意識が低い傾向がある、②家族は生きがいのなるが、ストレス源にもなる場合がある、③男性と女性では、生きがいの対象が異なっている、④夫婦間で相手に対する認識が異なっている、⑤家族等に頼らないようにするという自助努力意識をもっていることが推測された。

表1 調査年次別・老後における子どもや孫とのつきあい方 (%)

年	子どもや孫とはいつも一緒に生活できるのがよい	ときどき会って食事や会話をするのがよい	子どもや孫とは、たまに会話をする程度でよい	全くつき合わずに生活するのがよい	わからない	無回答
1980	59.4	30.1	7.1	1.1	—	2.3
1985	58.0	33.7	5.8	1.5	—	1.0
1990	53.6	37.8	6.0	0.9	—	1.7
1995	54.2	38.0	5.6	0.8	—	1.4
2000	43.5	41.8	6.6	0.9	7.0	0.2
2005	34.8	42.9	14.7	0.6	6.9	0.1
2010	33.1	46.8	11.2	1.2	7.6	0.0
2015	27.1	50.5	13.7	1.1	7.7	0.0

1980年～2015年の高齢者の生活と意識に関する国際比較調査

##### 5) 准高齢者の近隣や友人との交流

1995年の阪神淡路大震災は「ボランティア元年」といわれ、2011年の東日本大震災は「人と人の絆」に対して多くの国民や自治体が再考したといわれている。准高齢者の近隣や友人との交流について、「あなたは、ふだん、近所の人とは、どのようなお付き合いをなさっている

すか（複数回答）」という質問に対して、「外でちょっと立ち話をする程度」（68.5%）という軽いお付き合いが最も多い（図11）。一方、女性は、親密なお付き合いである「お茶や食事を一緒にしている（＝同伴行動）」（31.3%）や「物をあげたりもらったり（＝手段的サポート）」（51.1%）が高い（作図はない）。

「病気の時や、一人では出来ない日常生活に必要な作業が必要な時、同居の家族以外に頼れる人がいますか」という質問では、「別居の家族・親族」が66.2%でもっとも高く、「友人」（18.5%）や「近所の人」（18.3%）は「別居の家族・親族」と比較して極めて低い（作図はない）。「親しい友人の有無」については、「同性の友人がいる」准高齢者は57.5%であったが、「異性の友人がいる」は僅か2.9%であった。友人は同性のみという限定された友人関係であることが明らかになった。また、最も注目すべきは、「いずれもない」と回答した准高齢者は22.2%で（図12）、「男性」では29.8%、「女性」では22.6%だった（作図はない）。

このような結果から、男女共に、家族以外の友人、知人との交流の中で、互いの助け合いや支え合いを育む開かれたライフスタイルを模索することが求められる。特に、男性は女性よりも意識することが必要かもしれない。

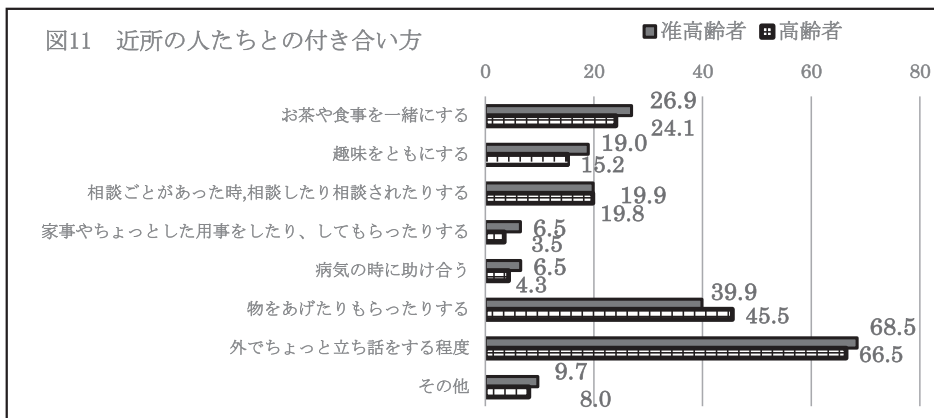


図11 近所の人たちとの付き合い方

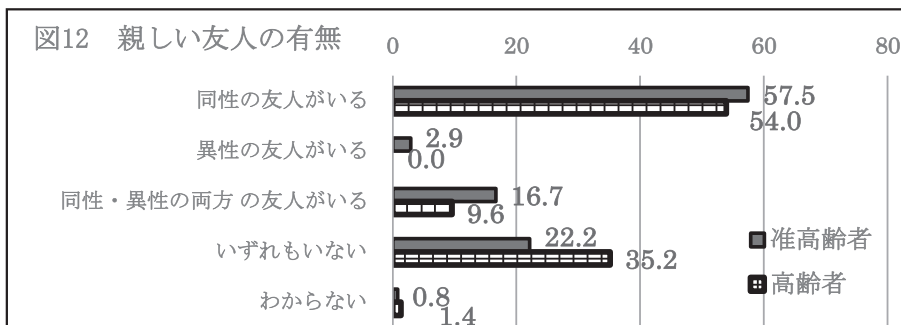


図12 親しい友人の有無

## 6) 准高齢者の社会活動

内閣府が公表している「平成27年版高齢社会白書」によると、61.0%の高齢者が自主的に社会活動に参加しており、これは20年前に比べると17.7ポイントも上昇した。

「平成28年 高齢者の経済・生活環境に関する調査」結果では、社会的な活動をしていると回答した准高齢者を対象に、「住んでいる地域での社会的活動（貢献活動）」（複数回答）について質問すると、「自治会、町内会などの自治組織活動」（22.1%）が突出して高かった。すべての項目において高齢者よりも高かった（図13）。また、准高齢者が活動に参加するようになった契機は、男性の場合、「自治会、町内会の誘い」（53.4%）が突出して高く、女性の場合、「自治会、町内会の誘い」（43.9%）、「友人、仲間のすすめ」（25.7%）、「個人の意思」（18.2%）が高かった（図14）。また、調査対象者の年齢は65歳～74歳に限定できなかったが、「平成25年高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」による同様の質問では、最も多かったのは「特にない」（40.7%）で、「友人、仲間のすすめ」（26.4%）や「個人の意思」（14.1%）は低い値にとどまった（作図はない）。

このような結果から、社会活動に対しては、「参加している人」、「参加する意思はあるが参加していない人」、「参加する意思がない人」の大きく3つのグループに分かれるようだ。

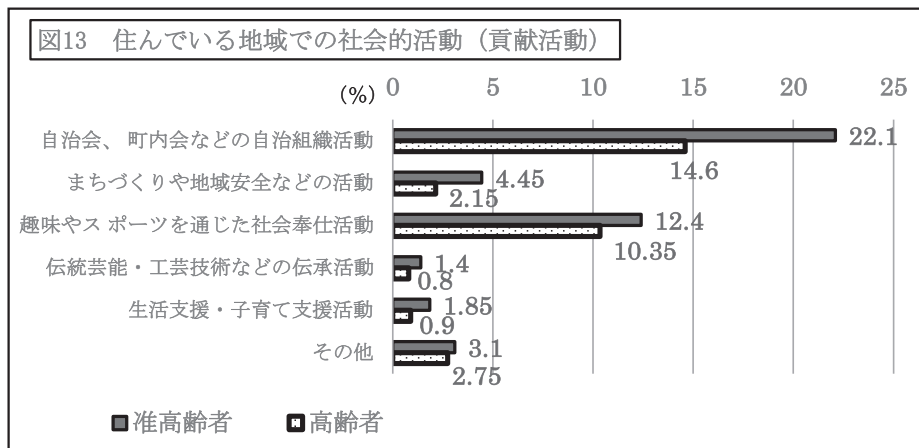


図13 住んでいる地域での社会的活動（貢献活動）

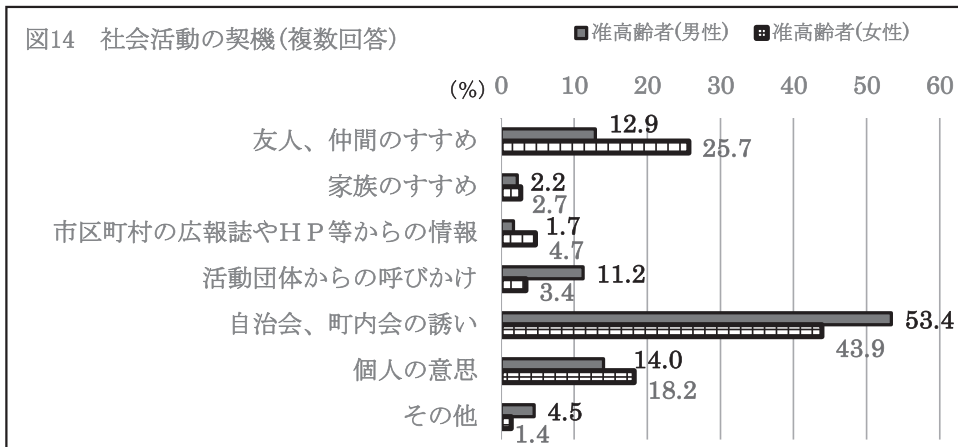


図14 社会活動の契機（複数回答）

准高齢者を対象に社会的な活動を始めた時期について質問すると、男性の場合「40代より以前」(32.6%)が最も高く、次いで、「定年退職後」(20.2%)であった。女性の場合は「40代より以前」(31.8%)と「60代」(31.8%)に、社会的な活動デビューの時期があった(図15)。

住んでいる地域での「活動をしていてよかったこと」(複数回答)という質問に対して、男女共に、「新しい友人を得ることができた」が最も高く、次いで、「安心して生活する為の繋がりができた」であった(図16)。身体的健康の向上以外の効果もみられた。特に、女性の場合、活動に参加するようになった契機は友人や仲間のすすめ、活動して良かったことは新しい友人を得ることができた等の結果をみると、男性よりも開かれたライフスタイルを好み、個人的ネットワークの形成が得意な傾向があるかもしれない。

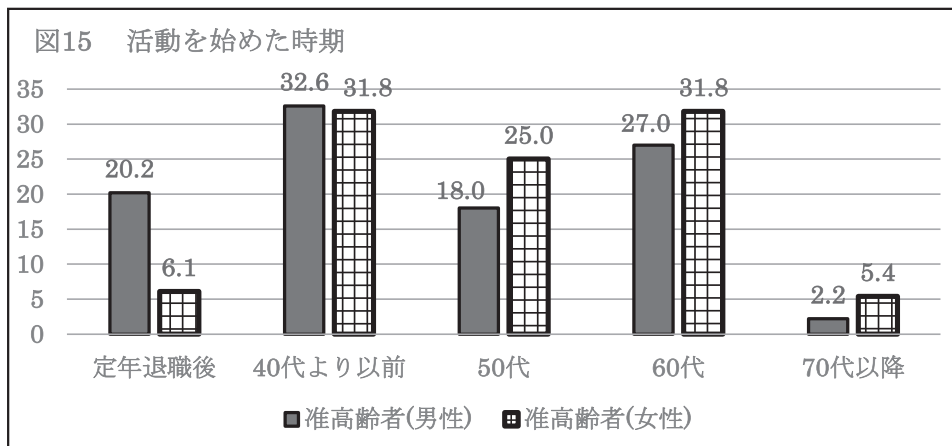


図15 活動を始めた時期

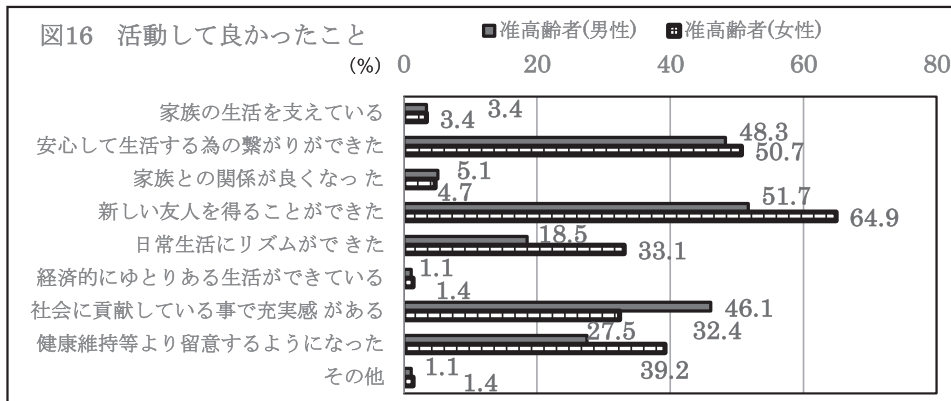


図16 活動して良かったこと

作表はしていないが、「平成25年高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」（内閣府）によると、自主的に参加している社会活動では「健康・スポーツ（体操、歩こう会、ゲートボール等）」が33.7%で最も多い。身体的健康に留意していることが推測される。「健康・スポーツ（体操、歩こう会、ゲートボール等）」の参加後の満足度は、「大変満足」（31.0%）と「満足」（61.3%）を合算すると9割以上になる。

一方、「社会活動を活発に行うためには、どのようなことが必要だと思いますか」という質問に対して、「経済的ゆとり」（54.9%）、「一緒にする仲間」（49.3%）、「時間的なゆとり」（39.4%）という回答があった。

高齢者の社会活動の参加促進要因に関する研究では岡本<sup>49)</sup>の研究が興味深い。岡本は、高齢者の社会活動の参加促進要因を明らかにするため、異なる地域で調査を2回実施し多変量解析をした。大阪市・市川市での調査の結果は、「居住年数が長いこと」、「地域社会への態度得点が高いこと」、「親しい友人や仲間の数が多いこと」、「外出や活動参加に誘われること」、「中年期に居住地域と何らかのかかわりがあったこと」であった。千葉県郡市部4市での調査結果は、「経済的暮らし向きが良好」、「親しい友人・仲間が多い」、「外出や活動参加に誘われること」、「中年期に地域との関わりがあったこと」であった。これらの調査で共通していた促進要因は、「親しい友人や仲間が多いこと」、「外出や活動参加に誘われること」、「中年期に地域との関わりがあったこと」をあげている。岡本の知見を参考に、新たな調査設計が求められる。

このような結果から、①准高齢者は社会活動への関心は低くないこと、特に、女性は低くないこと、②潜在的に、「参加する意思はあるが参加していない人」が存在すること、③社会活動の契機は、広報誌やHP等からの情報提供よりも、他者からの誘いや勧めといった口コミが多いこと、④社会活動デビューの時期は、男性の場合「40歳代以前」と「定年退職時」、女性の場合「40歳代以前」と「60歳代」、それぞれ大きく2つの時期があること、⑤社会活動の取っ掛けは「自治会、町内会などの自治組織活動」が多いこと、特に、准高齢者の男性にみられることが推測された。

#### 4. おわりに

ソーシャルワーカーは、准高齢者が、望ましい高齢期の生活を意図的に形成し、高齢者が地域で新しい社会関係をつくり、いきいき暮らすサクセスフル・エイジングを迎えられるよう、いかに支援すればよいのか、その特徴を5点示す。

第1点目は、身体的側面・精神心理的側面・社会環境的側面、さらには、過去・現在・未来という時間軸を加えて、准高齢者の日常生活や生活環境について、准高齢者とソーシャルワーカーが相互に確認し理解を深めること、その際、社会的なつながりの弱い人たち等に対しては、アウトリーチが求められる。第2点目は、准高齢者の能力、意欲・願望、嗜好、自信といった彼（彼女）らのプラス面を把握し、相互に確認し理解すること、第3点目は、准高齢者が生きている現代の社会経済状況や人間関係の変化等を把握し理解すること、第4点目は、ソーシャルワーカーは、准高齢者だけに焦点をあてるのではなく、その家族、地域へも視点を拡大し、システムとして捉えること、第5点目は、ソーシャルワーカーは、希薄化した地域の人間関係を再構築することが求められる。その契機の1つは准高齢者の社会活動であると考えられる。

課題としては、准高齢者が生活している個別の地域特性等について理解できなかった。今後は、フィールドワークを取り入れて、具体的に検討することが求められる。

#### 謝辞

本研究は、平成29年度 四天王寺大学地域課題解決研究奨励金の助成を受け、本学学生とともに取り組んだ結果の一部を報告いたしました。今後も、羽曳野市社会福祉協議会のご支援の下、羽曳野市内高齢者生きがいサロンで実施されている社会活動グループの皆様との交流を継続し、地域高齢者がサクセスフル・エイジングを迎えられるよう、いかに支援すればよいのか、ソーシャルワーカーの支援のあり方について学習していきたいと考えます。末尾になりましたが、ご協力・ご支援くださった皆様に感謝申し上げます。

- 
- 1) 厚生労働省の平成29年簡易生命表によると、男性の平均寿命は81.09年、女性の平均寿命は87.26年となった。厚生労働省Press Releaseでは、百歳高齢者表彰の対象者は32,097人、百歳以上の高齢者の数は、老人福祉法が制定された昭和38年には全国で153人だったが、昭和56年に千人を超え、平成10年に1万人を超えた。平成24年に5万人を超え、平成29年は67,824人、平成30年は69,785人、百歳以上の高齢者のうち女性は59,627人（全体の約88%）。
  - 2) 社会学や文化人類学においては、ソーシャル・ネットワークは高齢者集団の構造を意味し、高齢者個人の他者との関係をソーシャル・ネットワークと呼ばれることはほとんどない。従って、高齢者個人のネットワークを意図する場合は、個人的ネットワーク（personal network）や自我中心ネットワーク（ego-centric network）と表記する。  
浅川達人，第Ⅳ章 高齢者の人間関係 1. 人間関係を捉える，古谷野亘・安藤孝敏編，新社会老年学 シニアライフのゆくえ，110，2003。
  - 3) 稲垣円，近所づきあいのその先へー改めて「コミュニティ」を考える，ライフデザインレポート，第一生命生命経済研究所，2018。「近所付き合いの状況と今後の意向について質問したところ，「近所と親しく付き合っている」と回答した人の割合は年々減少し，2010年調査と2015年調査を比較すると，24.7%から12.3%に半減していた」



- 4) 内閣府, 社会意識に関する世論調査, 2018. 「20歳以上の人を対象とした調査結果では, 「近所の人と良く付き合っている」と回答した人は, 18.3%しかない」
- 5) 地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター研究所, 地域包括ケアにおける孤立予防戦略の展開 - 住民による「見守りチェックシート」の開発 - 報告書, 2013.  
「客観的な孤立の定義, 別居家族, 親戚, 友人, 近所の人との対面接触及び非対面接触（電話・メール・ファックス）の全てを合わせても1週間に1回に満たない場合（月3回まで）, また, いずれかの関係における合計回数が1週間に1回以上の場合（月4回以上）は非孤立とする. 客観的孤立は, 30代～60代の男性に多く, 主観的孤立は, 20代～40代の女性が多かった.
- 6) 秋山弘子編著, 高齢社会のアクションリサーチ: 新たなコミュニティ創りをめざして, 東京大学出版会, 2015.
- 7) 2014年7月メルボルンにおける国際ソーシャルワーカー連盟（IFSW）総会及び国際ソーシャルワーク学校連盟（IASSW）総会において採択された. 2015年2月に, 「社会福祉専門職団体協議会」が以下のように日本語訳した. 「社会変革と社会開発, 社会的結束, および人々のエンパワメントと解放を促進する, 実践に基づいた専門職であり, 学問である. 社会正義, 人権, 集団的責任, 及び多様性の尊重の諸原理は, ソーシャルワークの中核をなす. ソーシャルワークの理論, 社会科学, 人文学, 及び地域・民族固有の知を基盤として, ソーシャルワークは, 生活課題に取り組みウェルビーイングを高めるよう, 人々と様々な構造に働きかける. この定義は, 各国及び世界の各地域で展開してもよい」. [http://www.jaswhs.or.jp/upload/Info/275\\_Info\\_PDF.pdf](http://www.jaswhs.or.jp/upload/Info/275_Info_PDF.pdf)
- 8) 杉澤秀博, 豊かな生き方, 豊かな社会を考える サクセスフル・エイジングとは何か: 高齢期の生き方のモデル, TASC monthly, (476), 12-17, 2015.
- 9) Havighurst, R.J., Successful Aging, In R.H. Williams, C. Tibbitts and W. Donahue (Eds.) Process of aging Vol.1: Social and psychological perspectives, Atherton press, 299-320, 1963.
- 10) 小田利勝, サクセスフル・エイジングに関する概念的考察と研究課題, 徳島大学社会科学研究第6号, 127-139, 1993.
- 11) Ryff, C.D. Happiness is everything, or is it? : Explorations on the meaning of psychological well-being, Journal of Personality and Social Psychology, 57(6), 1069-1081, 1989.
- 12) Fisher, B.J. Successful aging and life satisfaction: A pilot study for conceptual clarification, Journal of Aging Studies, 6, 191-202, 1995.
- 13) Fries J.F. Aging Natural death, and the compression morbidity, New England Journal of medicine, 303, 130-135, 1980. 人の寿命の伸長には限界があるため（およそ120歳が限界値であると考えられている）, 生活習慣病等の慢性疾患や認知症等の発病を遅らせることによって, 罹患による障害のある要介護期間を短縮させることができる. 活動期間を進展させることが健康増進活動の目的だと指摘した.
- 14) 高橋龍太郎, 特集高齢者医療の現状と課題Ⅱ. 高齢者総合医療1. QOLの考え方, 評価, 日本内科学会雑誌, 第93巻第12号, 11-17, 2004.
- 15) Kutner B, Fanshel D, Togo AM, et al.: Five Hundred Over Sixty; A Community Survey on Aging, Russell Sage Foundation, New York, 1956.
- 16) Neugarten B.L, Havighurst R.J, Tobin S.S : The measurement of life satisfaction. Journal of Gerontology, 16, 134-143, 1961.
- 17) Lawton, M.P, The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale :A revision. Journal of Gerontology, 30, 85-89, 1975. ロートンは, ①自分自身に満足している, ②自分の居場所があると思っている, ③変化できないこともあることを受け止めていることがモラルが高い状態であると指摘した.
- 18) 古谷野亘, 柴田博, 芳賀博他, 生活満足度尺度の構造: 主観的幸福度の多次元性とその側面, 老年社

- 会科学, 11, 99-115, 1989.
- 19) 活動理論とは、高齢者も若い人と同じような社会的・心理的ニーズを持っているため、壮年期の社会的活動を維持することがサクセスフル・エイジングの条件であるという理論で、米国の中産階級の価値観と合致した。Lemon B.W, Bengtson V.L, Peterson J.A, An exploration of the activity theory of aging, *Journal of Gerontology*, 27, 511-523, 1972.
  - 20) 離脱理論とは、人のパーソナリティーは加齢に従って変化するため、社会的活動とモラルの関係も徐々に消失する。従って、社会システムを維持するためには高齢者は若い人たちの要請に応じて、その権限を委譲することが、高齢者にとっても社会にとっても望ましいという理論。Cumming E, Henry W.E, *Growing Old; The Process of Disengagement*, Basic Books, New York, 1961.
  - 21) Baltes, P.B. & Baltes, M.M., Psychological perspectives on successful aging: The model of selective optimization with compensation, In P.B. Baltes & M.M. Baltes (Eds.) *Successful Aging: Perspectives From the behavioral sciences*, New York : Cambridge University Press, 1-33, 1990.
  - 22) 杉澤秀博, 2章 領域別にみたサクセスフル・エイジングの概念と測定指標の特徴—米国における展開過程を中心に、藤崎宏子・平岡公一・三輪健二編, お茶の水女子大学21世紀COEプログラム誕生から死までの人間発達科学第5巻 ミドル期の危機と発達—人生の最終章までのウェルビーイング, 35, 金子書房, 2008.
  - 23) 「ごみ屋敷」とは、一般的に定義はされていないが、空き地・空き家における雑草の繁茂、汚泥・廃棄物の堆積等、敷地内にゴミが溢れかえっている建物のことで、住民からの苦情や戸別訪問等により認知しているもの。なお、ここでいうゴミとは所有者の意思によらず、通常人が見てゴミと判断できるものを指す。
  - 24) 白澤政和, サクセスフル・エイジングへのアプローチ, 老年社会科学第27巻第2号, 156, 2005.
  - 25) 岡本秀明, 地域高齢者の社会活動研究における概念定義と測定及び活動参加促進要因, 老年社会科学, 36(3), 346-354, 2014.
  - 26) 金貞任, 新聞省二, 熊谷修, 他, 地域中高年者の社会参加の現状とその関連要因—埼玉県鳩山町の調査から -, 日本公衆衛生雑誌51, 322-334, 2004.
  - 27) 佐藤秀紀, 佐藤秀一, 山下弘二, 他, 地域在宅高齢者の社会活動に関連する要因, 厚生指標48, 12-21, 2001.
  - 28) 玉腰暁子, 青木利恵, 大野良之, 他, 高齢者における社会活動の実態, 日本公衆衛生雑誌第42巻, 894-899, 1995.
  - 29) 橋本修二, 青木利恵, 玉腰暁子, 他, 高齢者における社会活動状況の指標の開発, 日本公衆衛生雑誌第44巻, 760-768, 1997.
  - 30) 岡本秀明, 高齢者の社会活動と生活満足度の関連—社会活動の4側面に着目した男女別の検討—, 日本公衆衛生雑誌第6号, 388-395.
  - 31) Rowe, J. W.; Kahn, R. L. Successful aging. *The Gerontologist*, 37(4), 433-440, 1997.
  - 32) Rowe, J. W.; Kahn, R. L. *Human Aging: Successful Aging: The MacArthur Foundation Study*. NY, Pantheon Books, 1998.
  - 33) GSA's 65th anniversary commemorative book, <https://www.geron.org/about-us/history/> 20180906.
  - 34) 秋山弘子, 自立の神話「サクセスフル・エイジング」を解剖する, 上野千鶴子・大熊由紀子・大沢真理他編, ケアの思想, 岩波書店, 184, 2013.
  - 35) 杉澤秀博, 2章 領域別にみたサクセスフル・エイジングの概念と測定指標の特徴—米国における展開過程を中心に、藤崎宏子・平岡公一・三輪健二編, お茶の水女子大学21世紀COEプログラム誕生から死までの人間発達科学第5巻 ミドル期の危機と発達—人生の最終章までのウェルビーイング, 23-47,

金子書房, 2008.

- 36) Strawbridge W.J., Wallbagen, M.I., & Cohen, R.D., Successful aging and well-being: Self-rated compared with Row and Kahn, *The Gerontologist*, 42, 727-733, 2002.
- 37) Matilda W. Riley, Letter to the Editor, *The Gerontologist*, 38, 151, 1998.
- 38) Crowther, M.R., Parker, M.W., Achenbaum, W.A. et al, Row and Kahn's model of Successful Aging revisited: Positive spirituality The forgotten factor, *The Gerontologist*, 42(5), 613-620, 2002.
- 39) 内閣府, 平成27年度第8回高齢者の生活と意識国際比較報告書, 44, 2015.  
同報告書では, 「現在, 福祉や環境を改善するなどを目的としたボランティアやその他の社会活動に参加しているか」において, 米国は76.5%の高齢者が何らかの活動に参加した経験を持っていた. 具体的な社会活動は, 「宗教・政治活動」が32.5%で最も高い.
- 40) 65歳～74歳の高齢者と75歳以上の高齢者間において, 「とても親しい」他者の数には差がないにも関わらず, 「あまり親しくない」他者の数が75歳以上の高齢者において少なくなるという調査結果がある. この調査結果は, 加齢に伴って他者との関係が選択的に削減されるという社会情緒的選択理論を支持した. つまり, 社会関係の縮小が, 高齢期の幸福感等を低めるとは限らない. Carsten LL: Social and emotional patterns in adulthood: Support for socio-emotional selectivity theory, *Psychology and Aging*, 7, 331-338, 1992. Lang FR, Carsten LL: Close emotional relationship in late life: Further support for proactive aging in the social domain, *Psychology and Aging*, 9, 315-324, 1994.
- 41) 古谷野亘, 第V章 サクセスフル・エイジング 1. 幸福な老いの研究, 古谷野亘・安藤孝敏編, 新社会老年学 シニアライフのゆくえ, 141-152, 2003.
- 42) 甲斐一郎・大内尉義・鳥羽研二他, 「高齢者に関する定義検討ワーキンググループ」報告書, 日本老年学会・日本老年医学会, 2015. 報告書の内容は, 「現在の高齢者は若くなっている」ということであった. 例えば, 最近の前期高齢者(65歳～74歳)では多くの慢性疾患の受療率が低下し, 生物学的年齢が5歳～10歳程度低下している. 体力の指標となる握力は, 10年の間に男性で4歳, 女性では10歳分若返っている. 残存歯が20本の年齢は, 1957年では男性50歳, 女性45歳であったのに対して, 2011年には男女とも65歳である. 知的機能の検査では, 60歳代の人の平均は最近では40～50歳代の人と変わらず, 現在の70歳代の人の平均は10年前の60歳代の人に相当する. 知的機能は, 10年間にわたる60歳代の上昇傾向が著しく, 2010年においては60歳代の平均得点は50歳代に接近した.
- 43) 秋山弘子, 第11回講演 超高齢社会のサクセスフル・エイジング, 将来社会を俯瞰した研究開発ビジョン研究会, *Today lecture series for University-Industry Boundary Spanning*, 148-161, 2009.
- 44) 手段的サポートとは, 作業を手伝う, 金銭や物品を貸す, 介護するなどのサポートのこと. 一般的には, サポートはポジティブなサポートと認識されるが, 過度な手段的サポートのために自立を損なうようなネガティブな手段的サポートもある.
- 45) 情緒的サポートとは, 励ます, 悩みを聞くなどのサポートのこと. 一般的には, サポートはポジティブなサポートと認識されるが, サポートを受領する者を悲しませたり, いらつかせたりするネガティブな情緒的サポートもある.
- 46) 日本学術会議社会学委員会社会福祉学文科会「社会的つながりが弱い人への支援のあり方について-社会福祉学の視点から-」報告書, 2, 2018.
- 47) 浅川達人, 古谷野亘, 安藤孝敏ほか, 高齢者の社会関係の構造と量, *老年社会科学*, 21, 329-338, 1999.
- 48) Koyano W: Filial Piety and Intergenerational Solidarity in Japan, *Australian Journal on Aging*, 15, 51-55, 1996.
- 49) 岡本秀明, 千葉県郡市部高齢者の社会的側面とサクセスフル・エイジングに関する縦断研究, 和洋女子大学紀要第56集, 113-122, 2016.